



2018 年 (平成 30 年)

9月号 (No. 880)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

今年の日中韓3国学生交流登山は 中国・青海省の祁連山脈へ

12回目を数える日中韓3国学生交流登山は7月27日から8月2日の7日間、今年は中国・青海省の祁連山脈で開催された。各国持ち回りで実施してきたこの交流登山も今回で最後となるが、海外の山が初めての隊員も氷河の山を体験し、5000m峰の登頂を果たすなど、有終の美を飾ることができた。

この夏、12回目の日中韓3国学

生交流登山が中国で開催された。

日中韓の3ヶ国で議定書を取り交わし、毎年一度、各国の持ち回りで開催してきた相互理解・友好親善を目的とした交流登山も今年で最終回であるが、その最終回は、青海省・祁連(きれん/チーリエン)山脈にある崗什卡(ガンシカ)雪峰における氷河での登山訓練と衛星峰の登頂を目的とした、真正の交

流登山となった。

隊長 中山茂樹

第3回(中国開催の1回目)は玉珠峰登頂のプログラムであったが、その後は高峰へのアタックというプログラムは実施されてこなかった。しかし、最終回の今回は、韓国や日本では体験できない5000mを超える山域での登山を計画していただき、参加希望の学生たちの意欲も例年になく旺盛であった。西寧空港までは各自が自費と自

目次

今年の日中韓3国学生交流登山は 中国・青海省の祁連山脈へ	1
第3回「山の日」記念全国大会を 鳥取県・大山で開催	4
「ぐんま県境稜線トレイル」が全線開通	6
広島湾岸トレイルと西日本豪雨災害	8
山に持って行く薬はどうする？ 携帯医薬品講習会から	10
東西南北	11
支部だより 越後支部	13
新入会員	14
図書紹介	15
図書受入報告	15
会務報告	17
ルーム日誌	17
会員異動	17
INFORMATION	17
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

力で到着する。日本の隊員たちもそれぞれ安いチケットを捜しての参加であったことと、時間的にも余裕がなかったため、5便に分かれての西寧入りとなった。

7月27日 夕刻までにメンバー全員が西寧に集合し、その夜、盛大な歓迎会が行なわれた。学生たちのテーブルはおとなしく缶ビールを何本か開ける程度だったが、主賓席の丸テーブルでは青稞酒(チンコウチュウ)のボトルが何本も置かれ、明日には4000mを越えなければならぬという現実を誰も考えていない、毎年と同じ酒宴となった。

7月28日 前日に朝食として携帯食を渡されており、暗いうちに準備を済ませてホテルの外に出る。観光バス2台で6時10分出発。ほ



ヤクの群れが遊ぶ4200mあたりの高原と崗什卡雪峰の山並み

り、菜の花畑が延々と続く一本道を走っていた。

西寧から一路、祁連山脈に向かって北西方向へ進んでいくので、青海湖などほかの景勝地には立ち寄らない。5時間ほどのドライブで門源県の北西部に至り、車の終点に着く。終点は崗什卡雪峰への入山口であり、みやげ物や飲食の屋台が数軒立っている。

祁連山脈は青海省と甘粛省の境界にある山脈で、チベット高原の北東縁をなす。酒泉県南方にある主峰・祁連山(5547m)をはじめ5000m峰数座を数え、高山地帯には万年雪と氷河の形で水を蓄える。山地から流出する多くの川が、山麓に点々とオアシス集落を成立させる。南麓が「草原のチベット」と言われるアムド地方の北縁であると同時に、モンゴル高原側の北麓には河西回廊があり、さらにその北側に長城が連なる(一部『日本大百科全書』〈酒井敏明〉を参考)。

車の終点で自分のリュックを担いで歩き出す。ほかに隊荷と各自の預けた荷物は馬が受け持つ。

ただか2時間のアプローチだが「キャラバン」と呼びたくなるよ

うな、情趣豊かな風景である。

歩き始めた地点はすでに3800mほどもあり、約5500m登ってベースキャンプに到着する。ここは今日から4泊するベースハウスとなる(標高4360m)。

木造平屋のこの建物は中央に大広間があり、その周りに3つの寝室がある。大広間はテーブルとイスがたくさん並べられ、詰めれば100人は収容でき、その窓際にはバイキング用の器がずらりと据えられている。寝室は全部で22台の2段ベッドがある。部屋自体が広く、床に寝れば大人数がここに宿泊まりできる。

私を含めてスタッフはこの2段ベッドを使うのだが、学生たちは1張2名のテントを建物横の広場に張って、テント生活をする。

2時間のキャラバンの途中から崗什カの山容が見えてくる。一番雪の少ない季節であり、山頂付近こそ白い雪をまとっているが、氷河はどこも黒っぽいまだら模様になっている。明日はその氷河にアイゼンを履いて入っていく。

7月29日 6時半に出発し、上部に向かって左側に大きく迂回して登っていく。4500mあたり

でアイゼンを履いて氷河に乗る。数日前に降雪があつたそうで、その雪が残っていたれば滑落停止訓練をするつもりだったらしい。残念ながら雪はすでに溶けて、どこも硬い氷ばかり。一番低い所まで氷河を下りていき、その舌端の斜度が30度ほどある所でフラット・フットイングの練習。

帰りは通常ルートをとって戻る。13時20分帰着。

朝、夕の食事は4〜5つほどの中華風のおかずで万頭、ご飯、パンなどのビュッフェ・スタイルである。人によって好き嫌いが出てくるし、疲労度が食欲に影響する。もちろん高所に順応していないと、食欲は明らかに減退する。

この夜、リーダーの次落(ツロロ)さんから、日中韓それぞれ2名ずつを選抜して、最終日(7月31日)に崗什卡雪峰の本峰にアタックする旨、リーダー会議で発表される。事前に受け取っている計画書には「衛星峰に登頂」とあり、明記されていないものの本峰へのアタックはないと推測できていたのだ、この決定は意外であり、同時に2名選抜と聞いてかなり戸惑った。行くなら全員で行かねば、日



4泊するベースハウス(4360m)に到着する

本のメンバーはおそらく納得しない。ルートの状況からして、全員でのアタックは安全管理上無理だという判断から計画にはなかったのだろう。

詳しい経緯は省くが、案の定日本メンバーにこのことを告げると大騒ぎになり、誰が行くのか、どうやって行くメンバーを選ぶのか面倒なことになったけれども、1時間ほど後にはアタック・メンバー2名とそれに続く7番目までの順位を決めた。その後も(翌日夜まで)、本峰アタックに1人でも多くの参加枠をもらえるよう、引き続き交渉・努力するというコンセンサスの下に、その際の参加順

位を決めたのである。それぞれに不安な心持ちで就寝。

7月30日 8時10分出発。通常ルートから登る。氷河に乗るまでガラガラサイド・モレーンを上がつていくのだが、一見して氷河は山塊の上部に取り残されているといった印象で、下部はサイド・モレーンのみが目立つ。

この日は4600mを越えたあたりで、少しの残雪を見付けて雪上訓練をする。何度も何度も、かちかちの氷の上にうつつら残った雪の上で滑落停止の練習をして、その後ロープをコの字に張って、登高器でのフィックス通過(ユマールリング)や下降器を使って下る



4500mの氷河舌端でアイゼン歩行訓練を行なう

練習。高度のせいですごくしんどい。昼まで結構真面目に雪上訓練をして、昼から衛星峰(5005m)にアタック。最後はフィックス・ロープを頼りに25度ほどの傾斜を登る。山頂には雪はなく、ガラガラ岩が積み重なっている。13時〜13時30分ころ全員登頂。

7月31日 結局は本峰の対面にある別の衛星峰(4800m)へアタックすることになった。

昨日の昼間に3名のスタッフが、本峰にかねてより張ってあったフィックス・ロープの掘り出しと点検に上がったのだが、氷が硬くすべてのロープを出せなかった。また、上部にもろい岩の露出してい



朝日が昇る崗什卡雪峰の連なりとベースキャンプのテント群

る部分があり、頻繁に落石を受ける。その上次の日の天気予報は、午前9時から雨だという。それやこれを総合して、明日の最終日は別の衛星峰へのアタックに変更する、という判断が昨夜なされたのであった。

9時出発。昨日までとは別のルンゼの右岸を詰めて、途中に孤立した氷河の残骸を乗り越えて本峰との稜線の鞍部に達し、そこから本峰とは反対方向に尾根を伝い、最後にもう一度アイゼンを履いて300mほど氷河を越え、4800m峰の頂上に立った。午後1時半。この頂上も雪がない。

午前中は良い天気だった。特に朝方はこの山行で一番の快晴で、昨日の天気予報を恨んだが、午後3時ころから雹や雨がともに降り出し、皆ぐっしり濡れて4時半に帰着。

本峰アタックの後でこの雨に遭ったなら、かなり消耗したことだろう。天気の上でも、本峰アタックはやめて良かったということだろう。

8月1日 ベースキャンプから下山。1時間であっけなく登山口へ下りる。若干の悪天候もあった

が、毎日行動し、2つの衛星峰に登頂できた充実した4日間だった。初めてパスポートを取得したメンバーや、海外の登山が初めてのメンバーにはとりわけ感動的な山行であつただろう。

冒頭にも書いたように、議定書を交わした日中韓3国学生交流登山の最終回は、中国開催ならではの環境と5000m峰登頂で有終の美を飾ることができた。3ヶ国それぞれに、このようなイベントを開催するにあたっての問題を抱えているのであるが、形を変えて学生たちの集う国際交流の場が、近い将来実現することを期待している。

【メンバー】

隊長／中山茂樹(日本山岳会副会長、YOUTH CLUB学生部担当理事)

隊員／川村洸斗(日本大学山岳部3年)

福島端流(日本大学山岳部3年)

村上洋道(日本大学山岳部2年)

池田昂史(青山学院大学山岳部4年)

保坂祐也(立教大学山岳部3年)

宇野悠真(同志社大学山岳部4年)

須見遼介(同志社大学山岳部3年)

REPORT

第3回「山の日」記念全国大会を
鳥取県・大山で開催

山陰支部長 中井俊一

第3回「山の日」記念全国大会が8月10日、11日の両日、中国地方の最高峰・大山(1729m)を中心で開催された。大会テーマは「神います山と共に生き、歩む開山千三百年『山を守る聖地』大山から」。1300年に及ぶ信仰の山としての歴史、日本の自然保護憲章発祥の地としての経緯、山頂の荒れた植生復元に取り組んできた活動を踏まえ、大山が「山を守る聖地」であることをアピールして、米子市と大山町を会場に、同実行委員会(会長・平井伸治鳥取県知事)の主催で開かれたのである。

大会初日の記念登山には、全国山の日協議会副会長で日本山岳協会長の小林政志さんや同協議会監事の成川隆顕さんを含め全国から公募した参加者、総勢76名が参加。大山ガイドクラブ会員をリーダーに7班が、早朝より山頂を往復した。山陰支部はサブリーダーとして各班をサポートし、協力した。

第3回「山の日」前夜レセプションはANAクラウンプラザホテル米子で10日午後6時30分から、参加登録者201名を大きく超える300名の盛大な集会となった。オープニングは女性合唱ゴスペルオーブの美しい歌声で、懐かしい『大山賛歌』だった。司会はBSS山陰放送の女性アナウンサー。開宴の言葉は超党派「山の日」議員連盟会長・衛藤征士郎議員で、祝日山の日制定について経過報告などの解説があった。

主催者挨拶は今大会実行委員会会長・平井伸治鳥取県知事が歓迎の言葉を、同副会長・伊木隆司米子市長が、大山寺開山1300年の歴史や自然の美しさ、恩恵の数々を挙げ、歓迎の意を述べた。来賓挨拶は韓国ソン・ソクドゥ江原道行政副知事、乾杯の発声は今大会実行委員会副会長・竹口大紀大山町長。続いて来賓紹介と次期開催地の後藤斎山梨県知事から勧誘の挨拶があった。

大山頂上への記念登山に参加した登山家・貫田宗男さんとほかの参加者がインタビューに応じ、天候に恵まれず下山途中で降雨に見舞われたのにもかかわらず、大山への好感を述べていた。やっと自由歓談になったのは7時20分ごろのことであった。

30脚のテーブルに201名の登録者を配置、さらに99名の追加があつて会場は大にぎわいになった。立食セルフサービスの料理は多彩を極めた。「鳥取の素材と大山産・旬の野菜のコラボレーション」をコンセプトとした料理はオードブル18種、魚料理5種およびお造り盛り合わせ、肉料理等々。コーナーにも10種類のメニューが用意された。バーカウンタ

ーには地酒の特別純米酒や大山ビール、白バラ牛乳など。歓談中、地元の伝統芸能(淀江さんこ節)がステージで披露され、拍手を浴び



登山基地での出発式を終え、いざ記念登山に出発

た。全国からの参加者との交流は時間が短くて、惜しまれた。午後7時40分、鳥取県議会・稲田寿久議長の閉宴の言葉で終了。

11日、記念式典は鳥取県大山町の大山総合体育館で開かれた。大山山麓の自治体や観光、経済、山岳分野の関係者ら約700人が出席、「山鐘」を鳴らして開幕した。超党派の国会議員が集う「山の日」



大山北壁をバックに7合目避難小屋付近で休憩する一行

議員連盟の衛藤征士郎会長は「山という自然を対象にした祝日があるのは日本だけ。山と向き合い山に感謝するのが山の日」と強調。平井知事は「山を守る聖地として引き継いでいきたい。その決意を今日、皆様と共有したい」と挨拶した。ステージでは、地元のボーイスカウトや合唱団の子どもたちが「山を学び、山の素晴らしさ、厳しさを知ろう」「山を敬い、山を守る気持ちの輪を広げよう」など5ヶ条の「とっとり大山『山の日』憲章」を元氣良く発表。大山山麓で農林漁業などに携わる生産者らが大山への思いを語り、出席者全員で『大山賛歌』を合唱して心を一つに

した。

来年の第4回大会開催地は山梨県で、第1回から引き継がれてきた「山の日」が、平井知事から山梨県の後藤斎知事に手渡された。

米子市公会堂で開かれたトークセッションは午後2時から。日本山岳会・萩原浩司さんの司会で女優の壇ふみさん、登山家の貫田宗男さん、観光カリスマの山田桂一郎さんを交えて、身近な山とともに生きる意義や大山のすばらしさなど語った。

檀さんは志賀直哉の小説『暗夜行路』で大山の大自然に触れた場面を朗読。『暗夜行路』で一番印象に残ったシーン。一度そういう景色を見てみたいと話した。5年ほど前、富山県の立山に登る前に始めた足腰を鍛える習慣が根付き、今でも1日150回のスクワットを続けているという。

テレビ番組でおなじみ、鳥取県出身のタレント・イモトアヤコさんの海外登山に同行する貫田さんは、大山の「一木一石運動」に言及。「私たちは山を踏み荒らした世代。今日、記念登山で山頂に登ったら、緑に覆われていた」と活動の成果を喜んだ。

観光カリスマの山田さんは、「標高が高いのはアルプスだが、大山には圧倒的な多様性がある。日本の山のいいところは四季折々の表情があること」と、その魅力に触れた。

また、貫田さんは「人間は探求心で進化してきた。日本では登山で遭難すると、会見を開き謝罪する場合もあるが、欧米でこの話をするときと笑われる。結果でなくチャレンジ自体が評価されるからだ」と、遭難者が強い非難の対象になる風潮に疑問を呈するなどして、多くの聴衆を魅了した。

「とっとり大山『山の日』憲章」

私たちが住む鳥取県は、大山をはじめとする緑美しい山々に囲まれています。

山ははるか昔から私たちを見守っていて、降り注いだ雨が清らかで栄養豊かな水となり、森や里を潤し、緑に覆われた山の中では多くの動物や植物が暮らし、私たちも登山やキャンプ、スキーなど四季それぞれに楽しむこともできます。

山や森は身近で命の源となる存在ですが、土砂崩れや洪水など、

ときに私たちに怖さを見せることもあります。

私たちの大山は、これまで長い間「一木一石運動」などの自然保護活動を行なってきた、自然を守る聖地です。

昔から山を守り、山の厳しさにも立ち向かってきたおかげで、今の私たちの暮らしがあります。「大山さん」、ありがとうございます。

私たちは「山の日」の今日、開山1300年を迎えた「神います山」、自然保護憲章発祥の地、「山を守る聖地」大山において、私たちにとつてかけがえのない存在である山とともに生き続けることを決意し、志を同じくする日本全国、世界中の人々とともに、「とっとり大山『山の日』憲章」を定めます。

◆山を学び、山の素晴らしさ、厳しさを知ろう。

◆山に親しみ、豊かな心を育もう。

◆山の恵みに感謝し、暮らしに活かそう。

◆山を敬い、山を守る気持ちの輪を広げよう。

◆山と共に生き、未来に向けて歩み続けよう。

平成30年8月11日

LONGTRAIL REPORT 1

「ぐんま県境稜線トレイル」が全線開通

群馬支部 武尾 誠

群馬県と新潟、長野の3県の県境稜線100kmを一気通貫する「ぐんま県境稜線トレイル」が8月11日の「山の日」に全線開通した。2000mクラスの稜線、本州の分水嶺を貫く全国最長級のロングトレイルとなる。コース管理・維持の方向性などが不透明で課題も山積。コースの定着や安全確保のためには、提唱した群馬県と沿線4町村、それに、群馬県内山岳団体の腰を据えた、息の長い取り組みが求められている。

群馬県は平成29年度、全線100kmのロングトレイルのうち唯一、登山道が未通だった新潟県境の白砂山〜三坂峠間約9kmに登山道を新設した。この空白区間は、JACC群馬支部と県山岳連盟、県勤労者山岳連盟でつくる県山岳団体連絡協議会の選抜メンバー10人が、28年9月に現地調査している。悪天候と視界をさえぎる濃い笹藪と苦闘しながらの山中2泊。GPSと地図・コンパス頼りの難航を極めた調査だった。

全線が登山道でつながったのを受けて、群馬県は8月11日までにシンボル・マークをアルミ板にプリントしたプレートを道標に取り付けた。プレートは直径7cmで、環境省の指導を受けて自然環境に溶け込むよう茶系の配色。ちなみにシンボル・マークは、稜線の山並みを「ぐんま」の「ぐ」の字で表現している。

取り付けには、県の依頼を受けた県山岳団体連絡協議会が当たった。88ヶ所の取り付け予定道標のうち、全面開通の11日までに「3分の2が完了した」（群馬県）という。このほか、西の起点の鳥居峠、白砂山の登山口、有人小屋の平標山の家、谷川岳・肩ノ小屋の4ヶ所に大型の案内板が、そして、登山道新設の9km区間の11ヶ所には、将来はスマート道標としての機能を付加できる道標が、9月中には設置される予定だ。

ロングトレイルとしての体裁は整いつつあるが、ソフト面では課題が山積している。これまで、ト



シンボル・マークがプリントされたプレート

レイルの維持・管理には、みなかみ町、中之条町、草津町、嬭恋村の沿線町村が当たっていたが、4町村にはそれぞれの事情があつて、取り組みには温度差がある。また、トレイルの一部の管理・維持は、新潟県や長野県の行政や民間団体が担当している経緯もある。群馬県が旗を振っても、行政の壁が立ちばたかることも予想される。

事実、11日直前に現地踏査した支部会員によれば、既設道標の老朽化や、数m先が見えないほどの笹藪に覆われたルートが少なからず存在した。さらに、テント泊が必要な区間もあるが、「適地」がない。水場も不鮮明。良く言えば「挑戦意欲をそそられるトレイル」、厳しく指摘すれば「読図とコンパス

は必携。一般の登山者には勧められない」という声も。とりわけ、こうした厳しいルートは白砂山以西、登山者が比較的少ない地域に目立った。

全線開通の「11日までに完了」と県は話しているが、15日現在で下刈りがまだ完了していない箇所がある模様。その後、登山者が少なくな手が入らなければ、登山道は荒れるのが必然。「山深い県境稜線での事故を未然に防ぐためにも道標の整備・下草刈りは、招く側、呼び掛ける側の義務と考えるのだ」（支部会員）の声は切実だ。

肝心の管理・運営の方向性は今後、県、4町村、山岳団体が構成



道標にプレートを取り付けける支部会員



白砂山から見た、新設された登山道

する「稜線トレイル活用促進協議会」に委ねられる。協議会は管理方法や運営、さらに、来年度を目標して登山道新設区間に設置予定の新設避難小屋の位置、仕様などを検討。このコースの売りで、入・下山口でもある水上、四万、草津などの著名温泉地との連携なども模索するが、町村の取り組み姿勢に濃淡がある上、維持・管理には新潟、長野側の行政も絡んでくる。

このため、群馬県の強いリーダーシップと、県内登山団体の積極的な関わりが一層求められる。

群馬支部は創設5周年を記念して、全通した稜線トレイルを、8月11日を挟んで7月14日から9月16日までの間に、計6回に分けてリレー踏査した。5周年の記念の年に当たり、群馬支部はいつになくスケジュールが過密。黛副支部長が行事の間を縫う苦心の計画を立てた経緯もある。

計画では、①鳥居峠→毛無峠②毛無峠→洪峠(一般道のため、ロードバイク利用も含む)③洪峠(横手山)→野反湖④野反湖(白砂山)→三国峠(登山道新設区間)⑤三国峠(三国山)→谷川岳・肩ノ小屋⑥肩ノ小屋→白毛門(馬蹄形縦走区間)がそれぞれのルート。四阿山登山口の鳥居峠から東の起点・白毛門登山口まで、計6回、延べにすると5泊11日。踏査の状況は逐次、群馬

支部のホームページで発信している。

全線開通の11日当日は、谷川岳・天神平に群馬県の大澤正明知事や沿線町村長、県内の山岳関係団体らが集まって、全線開通を全国に宣言するセレモニーが大規模に開催される予定だった。ところが、開通の前日、コースを事前視察していた群馬県の防災ヘリコプターが洪峠北東のガラン沢付近(中之条町)に墜落、防災航空隊員4人と地元の吾妻広域消防本部隊員5人の計9人、搭乗者全員が死亡するという痛ましい事故が起こった。このため、開通セレモニーは急遽中止となった。

死亡した隊員は30代後半から40代の中堅、ベテラン隊員が多い。地元紙の上毛新聞によると、なかには今年1月の本白根山噴火事故の際、救助に当たった隊員や、山岳救助で多くの現場を踏んだスペシャリストもいた。飛行の目的が稜線トレイルの事前視察だっただけに、山岳関係者として心が痛む。ご遺族や地域にとっても計り知れない損失となった。心からご冥福を祈りたい。

広島支部
田川宏規

に5年2ヶ月が経過した今、未曾有の西日本豪雨災害で大きく被災したHWTの昨日までを振り返り、今日を、そして明日への想いを綴ってみた。

HWT構想は、夢に想い描いた
グラランド・デザインに沿った形で
足早に進み、明日への夢と希望に
満ち溢れていたが、7月6日の豪
雨災害で重大な岐路に直面した。

8月26日現在、3市2町11現場に11回出動し、延べ26団体（HWT協加盟団体）プラス市民221人が参加した。それが我々に課せられた責務、使命であると思う。道がつながり、人が、心がつながって市民に愛されてこそこのトレイルであり、探求すべき理念だと思っている。

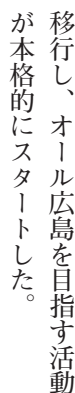
思い返せばHWT構想を提案した翌月には、本会報（2013年6月号）による運命的な後押しもあった、支部会員有志3人で「ロングトレイル研究会（以下、LTR研）」を立ち上げ、2014年4月17日踏査並びに整備活動の第一歩を踏み出した。

LT研の2014年10月の定例

2015年6月
には、HWTの
維持・管理・運
営を目的とした
「広島湾岸トレ
イル協議会（H

W T協）準備会を14の山関係団体
ほかで立ち上げ、連携して「ロング
トレイル・フौरラム in 広島」を
J A C広島支部・L T研主催で11
月に開催した。誰もが予想し得な
かったほど大盛況と高い評価を得
たこともあり、賛同者、協力者は
飛躍的に増大し、構想は夢の世界
から現実になったと実感した。

準備会を経てHWTを永続的に維持・管理・運営することで、より多くの方に活用いただくことを目的（登山振興、地域振興、観光振興）としたHWT協は、LT研を中核とした17山岳団体（882人）が参加して、2016年4月5日に発足した。これに伴いLT研の活動はJAC広島支部より協議会に



HWTの永続的な維持のため、HWT協踏査・整備隊(草刈り隊)は、陸路291・9kmを1年間で一巡することを目指し、活動している。すでに一巡(26回、317人参加)し終え、2017年9月から二巡目に入り、活動を継続している。

この活動を市民活動、広島文化とするため、「1人100m草刈り運動」という形で提唱し、HWT説明会、安全登山推進講座、トレイル体験会など、あらゆる機会を利用して周知、促進している。

すなわち、1人が1年に1回、鎌や鋏、鋸を持って山に入り、10



絵下山(593m)から見たHWTの安芸小富士(左)と広島市街西部

0 mの草刈りをするることによって、3000人の市民が参加していたできれば、300 kmのトレイルの永続的な維持が可能となる。この運動の成果なのか、草刈り隊への市民の参加は日増しに目立って増加している。

この運動をさらに拡大前進させるため、「歩いて健康に！トレイル(故郷の山々)の大掃除！我が故郷の自然を守る！」をテーマに掲げて「トレイルウォーク&クリンアップ1000人大会(TC1000)」を企画、2017年6月4日(広島県の山の日に、HWTコース周辺山城35会場に677人が参加して、第1回大会を開

催した。次いで今年の11月には、第2回の大会を34会場で開催の予定であった。

我々が目指すのはすべてがオール広島での「市民の市民による市民のためのトレイル」であるから、トレイルの周知・広報を目的に「トレイル体験会」を当初より実施している。LT研時代の山岳団体および行政向けのトレイル体験会(26回、592人)、HWT協での市民対象の第1回体験会(29回、1143人)に次いで2回目の大会を9月から予定していたが、TC1000Ⅱ、トレイル体験会Ⅱは、豪雨災害のためトレイルの現状確認ができないことから、安全確保上の問題もあり、やむを得ず中止、あるいは来春以降に順延した。

このほか、地域住民と密接につながる広島市71公民館での「安全登山推進講座」(参加費無料、公民館で座学、近隣の山で現地講習)はすでに16回を数え、公民館並びに受講者から高い評価を得ている。これら称賛の声に励まされ、定例化を目指し継続している。

さらには、毎月定例のHWT説明会やサポート活動を通じて地域社会に貢献し、深いつながりを築

くことで、地域に根ざした、愛されるトレイルづくりに努めている。これらの活動を通じてHWT構想に賛同し、入会した現役世代(30〜50代)を主とした六十余名が、今や構想の推進力であり、主力であることから、HWTの永続性は担保されたと確信している。

また、喜ぶべきことに、他に例を見ないこの流れは拡大の一途をたどっており、2015年のフォーラム後にトレランの世界的ランナーから、国際大会の開催を提案されている。

「広島湾岸トレイル・ウルトラトレイルランニングレース国際大会」は、車社会で例えるなら昼夜を分かたず走る「ルマン24」で、レベリックにはカーレースの最高峰「F1レース」に匹敵する。この構想実現のためには3年近い歳月をかけて検討、協議する必要がある、2020年3月末の開催を目指し、準備を進めている。

この大会開催には地域の協力が必要不可欠であり、HWTの完全復旧が絶対的な条件であることは言うまでもない。開催こそが、西日本豪雨災害から復興した証でもあり、トレイル活用の究極的な目

的を果たすことにもなる。山国日本の回避困難な土砂災害からの完全復興こそが我々の責務であり、使命であると自覚している。また、HWTの真価が問われるものであると強く思っている。

多くの市民から寄せられた多額の義援金や参加協力などの支援に励まされた、トレイルの被災状況確認のための調査隊は、4班態勢で9月1日から毎週土曜日に調査を続け、11月末までに全調査を終える予定である。

その調査報告に基づき「即応班(迂回路の探査・整備、修復・整備)」の随時展開と、人員を大量動員した「対応班(本格的な修復・整備)」をもって、来春の全通(復旧)を願っている。加盟28団体(1870人)は言うに及ばず、多くの市民、団体、機関、企業、行政の協力・支援を得て、オール広島での「市民の市民による市民のためのトレイル(HWT)」の早期完全復旧を目指している。

今こそオール広島で……。我々の願いはただ一つ、「広島一願道(hiroshima one-gan trail)」を合言葉に！

(広島湾岸トレイル協議会会長)

REPORT

山に持って行く薬はどうする？
携帯医薬品講習会から

山に行く際に必ず持参する物の

中に「医薬品」がある。しかしながら、何をどのくらい持って行けば良いのかは、縦走するのや日帰りかなどによって様々だと思われる。そんな疑問を解消するために、医療委員会として「携帯医薬品」のテーマで7月2日と23日の19時から講習会を開催した。講師は丹沢の麓にある秦野日赤病院の泌尿器科医で、日本山岳会のYOUTH CLUB委員でもある植木貞一郎氏だった。

講習では、救急セットは全般的に薬や医療材料などが含まれているので便利ではあるが、全部持つて行けば安心なのか？ ただ重いだけでそのまま持って帰ってくることも多いのではないかと。したがって、本当に必要な物を厳選して持っていることが肝要とのこと。

山での治療には限界があり、仮にケガをした場合は、受傷後1時間がゴールデン・タイム。この時間内に傷病者の体温を保持、止血、創

医療委員会 小清水敏昌

部を固定などして最低限の応急処置をすることが重要である。そして、速やかな下山行動をとり、医療施設までは傷病者の状態をなるべく維持する。山での事故は午後の下りに生じることが多い。疲労がたまり転倒、転落、滑落などが起こる。予防を心掛けることが大切で、登る前に水分を500ccほど補給する、ストックを持って行くなど、ちょっとしたことで予防できる。要は、事故を起こさないように前もって準備しておくことである。

薬などは個人用と共同用で用意する。個人用では、内服薬はアレルギーなどの副作用が生じることがあるので、共同装備から選ぶのではなく、本人が普段でも使っている薬たとえば鎮痛剤を数錠、擦り傷用の医療材料）などを持参した方がよい。共同装備としては湿布または外用剤、三角巾、体温計、応急ギプスなど、特殊な物を用意する。共同装備は日程や季節に応じて薬や医療材料の数量や種類を

選んで持って行く。また、止血する際には、二次感染を防止するためにビニール製の手袋を使うようにする。

講習終了後の質疑応答では、テープの大きさについて、ハチ刺され用の吸引器の効果などについて、またパーティの薬品リストを講師に見せて評価を求めた例もあった。参加者は2日が16名、23日が12名で、ほとんどがJAC会員であることから、関心の高いテーマだったと思われる。

会場ではしきりにメモを取っている人が多かった。講習後のアンケートによると、簡潔明瞭で基本的なことが良く理解できた、とした人が多かった。一方で要望として、医療委員会として山に持って行く医薬品の標準版を作成してほしい、骨折時の対応、テープリングの方法、ハチなどの害虫に対する対処など様々な声もあった。

今後、医療委員会としては要望の高いテーマを考慮して、会員に役立つような講習会を開いてい

きたいと思っているので、ご意見を寄せいただきたい。

提案した日帰り登山の携行医療セットの概要は基本セットとして鎮痛剤2錠、絆創膏2枚、滅菌ガーゼ1組、手ぬぐいまたはタオル1本、テーピング・テープ1本、外用軟膏（ステロイドと抗ヒスタミン剤の合剤）1本の6つ。これに個々の体質や山行形態に応じて必要な物品を追加する。ほかに全身状態を維持するためのレスキュー・シート、ツェルト、防寒保温ウェア、コンロも重要である。



植木講師による日帰り登山の携行医療セット

N 東 西 北 — — — 南 南 南 S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

続々・秘峰登山のススメ 〈上〉

西川元禧

一昨年と昨年の会報「山」に「秘峰登山のススメ」を掲載したところ、「もつとほかの秘峰も紹介してほしい」との声が多く寄せられたので追加して紹介したい。たくさんあったら秘峰ではないのでは？ と思われがちだが、ポピュラーな山のすぐ近くにも秘峰はあって、意外と多い。

道北では天塩岳（1558m）の北にあるウエンシリ岳（1142m）をお薦めしたい。登山口には夏でも溶けない氷のトンネルがあつて観光客も訪れるが、山の上は静かである。登山口から急登が続く。効率的に2時間40分で頂上に着く。頂上には一等三角点標石があり、南側は樹木で展望はないが、東に

はオホーツク海、北西には遠く利尻山（1721m）も眺められる。

道央では無意根山（1464m）をお薦めしたい。登山口の薄別から1時間半林道を歩くと電光坂に着き、ここから樹林の山道となり、さらに1時間半で高層湿原の大蛇ヶ原湿原に出る。湿原を過ぎてしばらく歩くと入口に豊富な湧水が出る無意根小屋（無人）に着く。さらに急登のあと笹原に出て、ハイマツの稜線を歩くと小屋から1時間20分で頂上に到着する。北には余市岳（1488m）、南西には羊蹄山（1898m）が見える。札幌市の山なのに登山者がいない、静かな山だった。

道央にはほかにも羊蹄山の南東に尻別岳（1107m）、ホロホロ山（1322m）、徳舜別山（1309m）、オロフレ山（1231m）など、登山口から2時間前後で登れる山々があり、いずれも羊蹄山の

眺めをはじめ、展望が良く静かで秘峰としてお薦めしたい。尻別岳は羊蹄山が目の前に大きく見え、オロフレ山とともにシラネアオイが多く、ホロホロ山と徳舜別山とは頂上間を1時間で往復できる。

十和田湖カルデラの外輪山の山々をお薦めしたい。そのうち大駒ヶ岳（1144m）、三ツ岳（1159m）、大文字山（1014m）の3つのピークを持つ戸来岳は、登山口から5時間強で3山を経由して登山口に戻ることができる。ほかにも2時間弱で登れる十和田山（1054m）、十和利山（991m）や、湖の西側の登山口・大川岱から2時間半登り、さらにその先1km続く高層湿原の西端に頂上がある一等三角点の白地山（1034m）など、どの山も静かで眼下の十和田湖はもちろん、八甲田山、岩木山、岩手山などの眺めが良い。

青森、秋田、岩手の3県境にある四角岳（1003m）も南隣の中岳（1024m）と併せてお薦めしたい。青森県側の花木登山口から1時間20分で灌木に囲まれた平坦な四角岳頂上に着く。頂上付近には高層湿原があつて、初夏にはミズバショウやニッコウキスゲなど

のお花畑が広がる。南に鞍部へ下って登り返すと20分で中岳頂上に着く。一等三角点標石のかたわらに200年前に建てられた猿田彦の石碑もある。展望は南東に稲庭岳（1078m）、七時雨山（1063m）、南西に皮投岳（1122m）、五ノ宮岳（1115m）、森吉山（1454m）、北には八甲田山、南には岩手山など、私にとつて曾遊の山々が眺められて懐かしい。

飯豊連峰からは連峰中央にある北股岳（2025m）をお薦めしたい。福島県川入から三国岳（1644m）→種蒔山（1791m）→飯豊本山（2105m）→御西岳（2012m）→大目岳（2128m）→烏帽子岳（2018m）と縦走して北上するにも、北の大石ダムから杵差岳（1636m）→頼母木山（1708m）→地神山（1850m）→門内岳（1880m）と縦走して南下するにも、東の石転び雪渓から登るにも時間が掛かる。登山者が少なく、池塘が点在しお花畑が広がる天国のような稜線を歩いてきただけに、連峰の中心で緑の山肌に白い残雪の斑模様をまとった飯豊の山々を360度眺められるのはうれしい。

奥会津は名の知られた一部の山を除けば秘峰だらけで、そのなかで長須ヶ玉山(1914m)や大中子山(1843m)は針葉樹林に囲まれ、展望は十分ではないが、樹間から真つ白い燧ヶ岳(2356m)や会津駒ヶ岳(2133m)などが見えると、息をのむような感動を覚える。ただし登山道がなく、残雪期に登るしかない。台倉高山(2067m)もかつてはかすかな踏み跡をやぶこぎしながら登ったが、馬坂峠まで林道ができて、峠からの道が登山道になり登りやすくなったので、秘峰としてお薦めしたい。頂上からは東に帝釈山(2050m)と山頂が湿原の田代山(1971m)、南に日光白根山(2578m)、西に燧ヶ岳とその奥には平ヶ岳(2141m)、北に会津駒ヶ岳とその奥には丸山岳(1820m)、会津朝日岳(1624m)など曾遊の山々の眺めはいつまでも見飽きることがない。

(下)に続く

〈執筆者・西川元禧氏は本稿をお寄せいただいたのちの6月25日、急逝されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。会報編集委員会〉

富士山登頂2000回を達成した實川欣伸会員

長田義則

實川欣伸会員は平成30年6月23日、念願の富士山登頂2000回を達成した。その節目の登山ルートは前日の朝、小田原市内の「御幸の浜」のゼロmを起点として、箱根を越えての富士山登頂を企てた。5人の挑戦者は、明星ヶ岳・明神ヶ岳を越えて、金時山頂では遊び心でスイカを担ぎ上げた筆者ら(関根美千子元会員、濱島美樹会員)と合流した。

暑さにくぐん熱中症ぎみで登ってきた挑戦者は、頬張るスイカに癒されもしたが、雲間に覗く富士山頂は高く、支援者のエールを背に御殿場口へと再び歩き出した。夜通し歩き続けるも通過時刻は遅れ、23日未明に御殿場口に着いた。そこで2人の挑戦者が加わり、7人でいよいよ頂上へと登り出した。心配した台風接近の兆しは、8合目あたりで急変し、吹雪となり最悪となった。吹き荒れる風で登頂どころではなく、身に危険を感じる。やむを得ず、緊急避難でト



山頂で富士山登頂2000回を祝う實川会員(中央)

ラパスして富士宮ルートに出ると、幸いなことに風は弱まって救われたが、挑戦者の4人が離脱を決め下山した。残る實川本人と加茂好清、鈴木研の剛の者3人が、執念を燃やして頂上を目指した。

實川会員は疲れのなか9合5勾まで登ってきて胸突き八丁を見上げると、「もはや、頂上は我にあり……」と確信して、^{つひに}呟いた。悪天候をとともに耐え抜いた加茂好清は、

實川会員の頂上までの追隨を許さぬ快調なペースに驚き、「化けた」としか言いようのない気迫に圧倒された。気象条件は最悪だったが、午後1時に3人は登頂の喜びに浸った。実川会員自身も、今までで

いちばん大変な、試練の富士山登頂だったと回想した。翌24日には名古屋にあって、恒例の「夏山フェスタ」の会場で講演も済ませている。この気力、体力のタフさには舌を巻くばかり……。

2010年の「山」(787号)に登頂1000回の記事を書いたが、13年までは6年連続して2000回超えの登頂記録があり、今回の達成はベースタウンしたかに見えるが、14、15、16年とエヴェレスト登頂に挑んだ理由もある。現地で不運もあって、到達点は南峰まで。実川会員の未到のエヴェレストに登頂してゼブンサミッツ完登の夢は成されていない。

それにしても富士山登頂2000回の重みは、単純に1年に5回登ったとしても400年もの年数がかかるかと思うと、実川会員の取り組みと実績はあっぱれの一言に尽き、富士山を見上げるたびにため息ばかり……。



支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へトリポート
します。

越後支部

「山の日」第2回糸魚川ジオパーク「子ども登山教室」

昨年の「山の日」から5年計画で展開する事業で、昨年の第1回は糸魚川市・根知「しろ池」周辺の自然観察会と「戸倉山」(975m)登山を行なった。この登山教室は、



蓮華温泉での集合写真

年々標高を高めていき、5年目には、新潟県の最高峰である小蓮華山(2766m)登頂を目指すという企画である。地元の子どもたちに、「山の自然に親しむ機会と、自然のすばらしさや豊かさを守り育んでいくことの大切さに気付いてもらいたい」との趣旨である。

今年度も、第2回子ども登山教室開催のチラシを作成し、小学4年生から6年生を主体に(低学年は保護者同伴とする)募集した。間近になって体調不良により不参加者が5名ほど出たが、子ども10名、保護者5名、スタッフ19名で、糸魚川市・蓮華温泉周辺の蓮華の森自然遊歩道の兵馬ノ平(1450mほどの湿地)などで自然観察登山を実施した。当日まで実行委員会を4回開催。第1回の2月の予定は、暴風雪により中止となり、メールでの意見交換とした。第2回は4月に、第3回は7月20日の下

見山行後に蓮華温泉で開催した。第4回は前日の8月10日、運営スタッフが一堂に集い、翌日の登山教室に向けた細部にわたる確認と危機管理態勢の最終チェックを行なった(途中の8月1日には、根知の大神堂公会堂にて参加者と運営スタッフによる事前学習会を行い、29名が出席した)。

当日、雨粒が落ちてくるなか、糸魚川市民会館前で受付後、全員が時間を守り、15分ほど早くバスで蓮華温泉へ向かうことができた。しろ池を通り、蓮華温泉に到着するころには霧雨模様となる。開会式・準備運動・記念撮影を行ない、3班に分かれて10時に出発。中部山岳国立公園内の蓮華の森自然遊歩道を周遊するコースに歩を進めていく。

スタートは、太いブナやオシラビソの樹林帯の中を下る。当日の講師は、総括リーダーで自然保護委員長の鶴本修一氏。説明のとき、鶴本講師の声が届くように各班があまり離れないように歩く。ブナの不思議、樹皮に張り付いている地衣類についてなど、小休止の時間を使った説明は、参加者・スタッフともども、初めて聞く話

もあって聞き入った。途中、霧雨が強くなって雨衣を着けた班もあった。子どもたちは綿のTシャツなどを着用していたので、速乾を考慮すると、判断が難しいところであった。しばらく進むと樹林帯に入り、雨は邪魔にならなくなった。

アヤメ平・兵馬ノ平では、スケッチブックに描かれた湿原の植物の説明があった。子どもたちは、大きくなったミズバショウの葉に驚き、いくつかの沢の水に手を入れて冷たさの違いに感嘆の声を上げていた。トリカブト・ジャコウソウ・オニシオガマ・ヒメイワシヨウブなどが多く見られ、湿原地帯には秋の気配が漂っていた。

ギボシ平では、食虫植物のモウセンゴケを観察。子どもたちは指で触るとネバネバするのを実感、虫などが入っているものは閉じていることも確認した。トンボがモウセンゴケに捕まると、体液を吸われて羽根だけが残るという話に皆、興味津々であった。

いちばんの楽しみの昼食は、濡れのなさそうな広めの場所を選び、20分ほどとした。子どもたちからは、「花が次から次に現われ、忘れ



高層湿原の特徴を学ぶ子どもたち

てしまうので、花名を覚えるにはどうしたらよいか？」と質問があった。それには、「1回の登山で3種類ずつ覚えていけばいいのでは……」と、楽しく回答したりした。

シャクナゲ尾根はネズコ（クロベ）やアカマツの太木の根がむき出しの登山道である。太く曲っている根を掴み、何本も露出している根を自在に手操りながら、よじ登ったり、下りたり。「冒険しているみたいで楽しい」と、子どもつぶやき声。また、マツやブナの葉の林床は「ふかふかで気持ちいい」などと、楽しんでいる子ども姿があった。カモシカ展望台ではガスが懸かっていたが、一瞬の切れ

間に沢や瀬戸川の流れが見え、皆が感激。そして、山の冷気が汗ばんだ体をさわやかにしてくれて、気持ち良かった。

鉱山道の雪倉岳と蓮華温泉の分岐で最後の休息ののち、水平道を40分ほど歩いて予定より20分早く蓮華温泉に到着することができた。猛暑を忘れさせてくれた霧と小雨で熱中症の心配もなく、少しずつ早めの行動がとれたこと、そして、小学1年と3年の男子も最後までがんばって歩き通せたことが、スタッフ一同の喜びとなった。

このあと皆で登山後のストレッチを行ない、温泉入浴を楽しんだ。そして閉会式へと続いた。

終了後、帰路のバスの中で、「来年の山の日も、第3回白馬大池登山でまた会おうね……」と話しながら時間を過ごした。個人的には、下見山行で見られた葉緑素を持たない腐生植物のギンリョウソウが、当日は1本も生えていなかったことが残念で仕方なかった。子どもたちに特に見せたかった植物の一つであった。これらはまた、次の登山教室への楽しみとして残しておきたい。

参加した子どもたちや保護者に

とって、初めて標高約1500mの登山道を歩くということで、高山病などが心配されたが、皆が元気良く、霧と小雨でも「楽しかった！」と感想を述べていたことは、運営スタッフの一員として大きな喜びとなった。

筆者はこれから先も、子どもたちがいっぱい自然に親しみ、山を好きになり、登り続けて欲しい、と願っている。参加された子どもたちと保護者の皆様、市民応援スタッフの小山氏、糸魚川消防署の丸山氏、運営スタッフの岳友の方々、本当にありがとうございました。

（井口礼子）

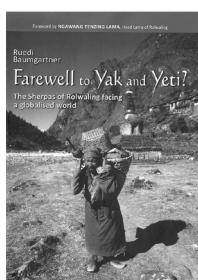




図書紹介

RuediBaumgartner 著

Farewell to YAK and YETI? —The Rolwaling-Sherpas facing a globalised world—



VAJRA BOOKS
カトマンズ
2015年
B5変型 296頁
価格表記無し

この著書の舞台はエヴェレストのあるクーンブ山群の西に接している。1951年、英国エヴェレスト偵察隊のE・ヒラリー隊員がクーンブ山群から「世界で最も壮大で困難な峠である」と語ったタシ・ラブチャ峠(5755m)を越えて入ったロルワリン山群である。

著者はスイスの「地域開発」の専門学者で、1970年代から同地を度々訪問した。この40年間のシ

エルバ社会の驚異的な変化を観察したフィールド・ワークの集大成である。親子孫3代を対象にした研究、風土病、逸話に富んだ成功者の話、新旧写真の対比もあり、興味深い。

次のような7章に分かれているので、どこからでも読める。

- 1・西洋人から見たシエルパ
- 2・貧困から富者へ
- 3・隠れた谷間の生活
- 4・村の今昔
- 5・狭間の子ども
- 6・エヴェレスト登山の危険と報酬
- 7・温暖化とロルワリン。

同地はシミ村を除いてガウリサンカール山麓の荒涼とした高地で、広大なヤクの放牧地は見られるが、耕作地は家の周りが石垣で囲ったジャガイモを主にした小さな畑ぐらい。長年チベットとの交易で細々と生計を立ててきた。住民たちが現金を入手するには外国の遠征隊などに参加するほかに術はな

く、結果として、クーンブに次いでヒマラヤ登山に欠かせないたくさんのシエルパを輩出した。

往時から聖地を守る伝統的なリーダーと住民間の争いが絶えなかった。1960年代からこの辺境地にも外部の環境が影響し始め、62年、マヘンドラ国王時代から政府の統治力が及んできた。96年からの10年間は国内での紛争やマオイスト台頭、そして、王制の廃止といった体制変化を経て、2008年からネパール連邦民主共和国の体制下にある。

現在、シエルパ業で稼いだ住民たちがカトマンズでコミュニティを作るほどに成功し、なかでもシエルパニを含むロルワリン育ちのエヴェレスト登山者によるエヴェレスト・サミッター・クラブとそのメンバーたちが積極的に村の運営に貢献し、重要な役割を果たしている。しかし、都会で生まれ育った2世や3世に故郷離れが起こっている。ロルワリンでは鳥獣肉を食せずチベット仏教の聖域を守ってきたが、次世代にこの伝統的な宗教観が受け継がれていくのか案じている。

筆者は昨年、ロルワリンのト

図書受入報告(2018年8月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
鈴木泊男	猿投の森：森づくりの気くばり、目くばり	100p/26cm	日本山岳会東海支部	2018	発行者寄贈
小林義亮	笠置寺 激動の1300年：ある山寺の歴史(改訂新版)	444p/20cm	宮帯出版社	2018	著者寄贈
真下誠二 他(編)	札幌山の会 50年の歩み：1968～2017	372p/26cm	札幌山の会	2018	発行者寄贈
萩原浩司	萩原編集長の山塾：実践!登山入門	190p/21cm	山と溪谷社	2018	出版社寄贈
田淵行男	黄色いテント(ヤマケイ文庫)	397p/15cm	山と溪谷社	2018	出版社寄贈
谷甲州	白き嶺の男(ヤマケイ文庫)	350p/15cm	山と溪谷社	2018	出版社寄贈
小林百合子	山小屋の灯	176p/20cm	山と溪谷社	2018	出版社寄贈
四角友里	山登り12カ月：12 Months 37 Mountains	168p/21cm	山と溪谷社	2018	出版社寄贈
全日本山岳写真協会(編)	山稜2018：2018年全日本山岳写真展作品集	144p/22cm	全日本山岳写真協会	2018	発行者寄贈
滑志田隆	埋もれた波濤	269p/20cm	論創社	2018	著者寄贈

レッキングを楽しんだ。2015年4月の大震災で大きな被害を受けた、山麓の谷底タマ・コシから左岸の岩壁に拓かれた急勾配の生活道路兼トレッキング道もスイス財団によって補修されていた。登山者やトレッカーが訪れて村が活気に溢れることを願う。

しかし、トレッキング中に大型ヘリコプターが2日連続で上空を飛んだ。クーンブ方面からタシ・ラプチャ峠を越えてきたヨーロッパ・トレッキング隊の隊員をロールワリン最奥のナ村(4180m)でピックアップし、半時間でカトマンズに空輸するためだ。同行してきたガイドやポーターたちは大きな荷物を背負って、道中に点在する茶屋や売店などに見向きもせず下っていた。これらの隊は一夜ナ村でテントを張ったが、ロールワリンのヤクやポーターは全く活用せず、現地にほとんど貢献していない。また、1960年、E・ヒラリーに始まり、注目を集めたイエティ調査隊の来訪も絶えて久しい。

早朝に車でカトマンズを発てば、夕方には圧倒的な秀峰を間近に見ることが出来るロールワリン。今

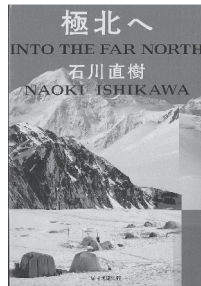
後この地を訪れる方には、事前にぜひご一読をお勧めする。

当著書の印刷製本に取り掛かうとしていた2015年4月、ネパール大震災が起こり印刷工場内のすべてが塵埃に埋まった。それを掘り起こして製本にこぎつけたものだ。

(南井英弘)

石川直樹著

極北——INTO THE FAR NORTH



2018年3月
毎日新聞出版
四六判 208頁
1600円+税

極北の地にゆるぎない憧れを抱く人は、多数ではないにしろ必ず存在すると思う。人間の生存に一切関与することなく、いくつもの生命が何百年、何千年と繰り返される極北の地だからこそ、人を惹き付けてやまないものがあるのだろう。

著者もそんな一人の少年だったが、師と仰ぐ先達の存在と本人の行動力がさらに意識に磨きをかける。アラスカとの国境に近いカナ

ダ東部の町ホワイトホースから車身、ユーコン河のカヌー下りを試みる。急流の瀬に差しかかるたびに緊張で体を固くし、野生動物の影におびえながらも下り切った経験は、何ものにも代えがたい自信と野性への思いを覚醒させる。そして、20歳で挑んだデナリ(マッキンリー)登頂。スキーとソリによるアプローチ、ピッケルとアイゼンを駆使した登降、そして、未知の高度への不安を抱きつつ掴んだ登頂の手応え。

こうして少年は、デナリ登頂を端緒にしてアラスカ、グリーンランド、ノルウェー、スバルバル諸島カナダ、そして2度目のデナリへと旅を重ねながら、写真家、表現者として長じていく。本書は、そうした数回にわたる旅の軌跡を綴った紀行である。

北極圏は、通常、北極点を中心にして北緯66度33分以北の地点を言う。巻頭に掲載されている北極点を真上から望んだ地図は、読者には見慣れないものだろうし、地名もきわめてなじみが薄い。しかし、この地域に一方ならぬ思い入れを抱く著者は、この僻遠の地を丹念に訪ね歩く。先達たちの事績

を追ひ、先住民の文化に畏怖の念を抱きながら旅は続く。

写真を撮ること以外、明確な目的はなかったという。しかし、グローバル化による自然や伝統文化への浸食は容赦ない広がりを見せている。だからこそ、人と自然がうまくバランスを取りながら生きる極北の地。そこに暮らす人々の生活と自然環境の危うさ——、そうした懐の深さが極北の地の魅力なのである。

写真と文章によって表現し続ける著者の気持ちが凝縮された作品である。

(神長幹雄)

会務報告

■8月の理事会は夏休みのため休会でした

ルーム日誌 8月

2日	YOUTH CLUB
4日	三水会
6日	総務委員会
7日	常務理事会
8日	国際委員会
9日	休山会
14日	山岳研究所運営委員会 スケッチクラブ
15日	YOUTH CLUB つくも会
20日	自然保護委員会 YOUTH CLUB
21日	山岳編集委員会 里山歴史研究会
22日	家族登山普及委員会 麗山会 00会
23日	公益法人運営委員会 01会 山遊会

24日 総務委員会
27日 青年部 フォトクラブ 緑爽会

28日 デジタルメディア委員会
平日クラブ

29日 図書委員会

30日 マウンテンカルチャークラブ

31日 総務委員会 YOUTH CLUB

8月来室者 265名

会員異動

物故

水沢富一郎(4025) 18・8・20

岡安正光 (4109) 18・8・6

畠中六左衛門(5840) 18・7・30

羽賀克己 (7500) 18・7・8

酒井明徳(10397) 18・8・2

内田敏子(12788) 18・7・21

野島信隆(13849) 18・8・5

安田二三男(14015) 18・8・23

退会

田寺尚和 (10303)

中村嘉国 (15176) 青森

INFORMATION

◆植物観察の基礎知識を学び合いましよう 自然保護委員会

当会では植物観察会を開催してきましたが、今回は自然保護活動に活かせる基礎知識「モニタリングの必要性について」を学び合いましよう。ご希望の方は当日、会場にお越し下さい。

講師 下野綾子・自然保護委員
(東邦大学理学部講師)

日時 10月31日(水)19時～

会場 日本山岳会104号室

問合せ 川口章子

TEL・FAX 0474638721

✉ syunaki@pony.ocn.ne.jp

◆第4回家族登山教室 檜原・都民の森で「山ごはん」と「キーホルダー作り」体験 参加者募集

当会では家族で登る山の楽しさ

を知ってもらうための登山教室を開催しています。教室は2ヶ月ごとに年6回予定。第4回は檜原・都民の森で、「山ごはん」や木工工作機械使用のキーホルダー作りを体験。山登りの多様な楽しさを、多くの子どもたちに味わってもらいたいと思っています。

開催日 10月21日(日)

集合 ・電車利用は8時40分、JR武蔵五日市駅前「数馬」行きバス乗り場 ・車利用は10時15分、

「檜原・都民の森」駐車場前の売店「とちの実」(無料駐車場8時

～17時30分)

行程 9時 数馬行きバス乗車――

10時15分 都民の森――11時 登山

開始――11時50分 大滝休憩小屋

(山ごはん作り体験)――13時 野

鳥観察小屋――13時40分 木工工

芸センター(キーホルダー作り

体験—15時 解散

対象 小・中学生とその保護者
(定員5家族)

費用 大人1000円、子ども500円(保険料など)、山ごはんは材料実費を精算。そのほか交通費、見学料など実費。弁当持参
申込み／問合せ 飯田邦幸(家族登山普及委員会)

TEL・FAX 03-3268-9654

携帯 090-1990-3508

E-MAIL ida3268@gmail.com

申込み締切 10月15日(月)先着順

(定員になり次第締め切り)

*参加者全員に「やまねんバッジ」

「親子登山ハンドブック」進呈

◆講演会「山を10倍楽しむ」

東京多摩支部

NHK-BBS『実践! にっぽん百名山』の編集長に山の楽しみ方について語っていただきます。

日時 11月21日(水)18時30分(受付開始18時)

会場 立川市女性総合センターア

イム 立川市曙町2-36-2

TEL 042-528-6801

講師 萩原浩司氏(山と溪谷社山岳図書出版部長・当会会員)

演題 「山を10倍楽しむ」

参加費 500円

定員 180名(申込み先着順)

申込み・締切り 11月15日(木)まで

に ハガキ、Fax、メールで東京多摩支部総務委員会・富澤克禮まで 〒187-0021 東京都小平市上水南町3-4-42

FAX 042-324-4050

E-MAIL sounu.tama.yama@gmail.com

◆北高尾の森を歩こう! 私たちの紹介とハイキングのお誘い

高尾の森づくりの会

私たち「日本山岳会高尾の森づくりの会」は、2000年に、当時の自然保護委員会の河西瑛一郎会員などの有志によって設立され、以来、景信山に近い北高尾の国有林で広葉樹を植えて、森づくりを続けています。また、私たちの会の活動領域は広がり、気仙沼大島の復興支援活動や、三宅島の緑化再生事業などでボランティア活動も続けてきました。

現在では会員数は約200名、日本山岳会会員以外の会員も多くなりました。八王子市などの法人会員からの活動参加者も多く、毎月の週末には、小下沢のある小屋に集まり多様な活動を続けています。

今秋、東京都で全国育樹祭が開催されることを記念して、日本山岳会会員および一般の方々を対象に、「高尾の森づくりの会」の植栽

地と森を巡り、秋の高尾を歩きながら、育樹の大事さと森の動物植物を紹介するハイキングを実施することにしました。秋の北高尾の山を楽しむために、ぜひご参加ください。軽い山歩きをしながら私たちの2018年の活動の成果を見ていただくことができます。

申込み方法と詳細は、高尾の森づくりの会のホームページ <http://jactakaonet.net>にあります。

(申込み期限は10月5日)

開催日 10月21日(日) 雨天中止。

おおよそ午前9時から午後4時まで。

場所 JR高尾駅から8時10分発小仏峠行きバス乗車、日陰沢バス停で下車し、徒歩15分の小下沢梅林に集合。ここから徒歩30分の小下沢作業小屋から植林地の山へ。

費用 保険料相当額500円を当日徴収。弁当、交通費は自己負担。

参加者 先着30名(子どもは10歳以上、保護者同伴に限ります)

(高尾の森づくりの会代表・吉川

正幸

◆講演会のお知らせ

緑爽会

講師 前日本山岳会会長・緑爽会

会員・森武昭氏

演題 自然エネルギーに関わって

35年―現状の課題も含めて

日時 10月29日(月)18時

場所 日本山岳会104号室

定員 先着順35名

問合せ 富澤克禮

TEL・FAX 042-324-4050

✉ tomizawa-katsunori@nifty.com

◆故寺田和雄氏の山岳関係蔵書を「山岳文庫」として目録公開

町田市民文学館

2015年、84歳で逝去された
会員、寺田和雄氏(会員番号123
43、町田市前市長)の山岳書コレ「会員優待サービス」変更のお知らせ
〈会員サービスWG〉*「上信越」土合山の家／宿泊
料金の10%引き→500円引
きに変更(平成30年10月1日
より)。ただし、団体の場合は
10%引きに変更なし。クシヨンが、ご遺族より町田市民
文学館(東京都町田市)に寄贈され、
「山岳文庫」として目録が文学館ホ
ームページに公開されています。寺田氏は生前、優に5000冊
を超える蔵書に囲まれながら、多
忙を極める公務を終えて家でゆっ
くり読書するのが何よりの楽しみ
とよく話されていました。特に、若
いころから古書店を回って探し集
めた山岳書のコレクションは密か
なご自慢でした。文庫には小島烏水『日本アルプ
ス』(前川文栄閣・1910年)、大
島亮吉『山・研究と随想』(岩波書
店・1930年)、藤木九三『雪・
岩・アルプス』(梓書房・1930
年)、エミール・ジャヴェル『登
山家の思い出』(角川書店・195
2年)といったその分野では古典
的な名著から、町田市在住の作家・
イラストレーター沢野ひとさんの
山の随筆まで、図書1277冊、
さらには『ケルン』『山小屋』『山と
高原』(いずれも朋文堂)といった
戦前の山岳雑誌など823冊が収
められています。目録はホームページ「町田市民
文学館ことばらんど」内の「町田ゆ
かりの作家たち」から検索してください。図書は館内での閲覧のみ
となりますが、すでに絶版などで
入手困難な図書も多数ありますの
で、ぜひご利用ください。

◆中村光吉展 ―油彩と写真―

会期 10月25日(木)〜31日(水) 最終

日は10時〜16時

会場 泉の森会館2階ギャラリー

狛江市元和泉1-8-12(小田急

線・狛江駅北口徒歩1分)

TEL 03-5497-5444

問合せ 携帯 090-05339-6

238(中村)

『山岳』第百十三年の訂正

先ごろ発刊されました『山岳』第
百十三年の197ページ、新永年
会員の所属支部に誤りがありまし
た。訂正させていただくとともに
お詫び申し上げます。

牧 繁録→埼玉 田中弘士→神

奈川 澤登均→東京多摩 小川

武→東京多摩 松屋信之→無所属

長谷川昌雄→神奈川 近藤育代→

信濃 原謙一→信濃 梅本知榮

子→埼玉(敬称略)

同144ページ、下段右から6

行目の「44ページは441ページ」
の誤りでした。

◆編集後記◆

●8月下旬、山研に2泊しました。
私が初めて山研に泊まったのは今
から40年以上も前のことで、当会
の山崎安治、近藤信行両先達とご
一緒でした。『小島烏水 山の風流
使者伝』を執筆されていた近藤さ
んの調査山行に参加、沢渡から霞
沢を遡行、「ネズミ落し」のゴルジ
ュを抜けて右俣に入り、徳本峠・
霞沢岳間の稜線を乗越して白沢を
下降、明神に出たときでした。●烏水が書いた「文庫」のコピーを
片手に、槍ヶ岳への行程を丹念に
点綴しながら彼の足跡を確認す
る作家としての姿勢には、真に頭
の下がる思いでした。そのときの
稜線の乗越地点を徳本峠から確認
したかったのですが、予定の1日
は生憎の雨で、3食ビール付きと
なってしまうました。(節田重節)

日本山岳会会報 山 880号

2018年(平成30年)9月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社